

改英  
東本  
正七位大島貞益  
纂譯

プラレンタゼモト記上

ヘンリー二世 一千百五十四年十二月十九日

王位ニ昇ル王ハアレンヂーノ侯ゼオフライトノ子  
ニシテ王ノ家ヲ名ケテプラレンタゼモトト云フ  
プラレントハ植物ノ義ニテ王ノ先祖ニゼニス  
ト云フ草ヲ咲上ニ挿ミシ者アリヨリテ遂ニ其  
姓トスト云サクソノ末王エドワルド以来

再版  
賊踵起シ其争ハスレテ位ヲ得ル者ハ此王ヲ始  
トス○王幼ニシテ其叔父ロバールドノ教育ヲ受  
クロバールドハ其頃徳行ヲ以テ稱セラレシ者ナ  
リ故ニ王長シテ諸ノ技藝ニ通セルノミナラス  
又甚々文學ヲ好ミ位一即チ後專ラステヘシノ虐  
政ヲ廢シ惡幣ヲ改鑄シ内亂ノ間築造シタル諸  
城砦ヲ毀ソアルフ迄トノ時以來多ク善政ヲ施  
シ民ノ為ニ愛セラレシコト能ク此王ニ及ブ者  
無シ○一千百五十五年王蘇格蘭ニ至テステヘ  
レヨリ此國ニ讓レル地ヲ回復レ同五十七年威

爾斯ニ入テ又其侵地ヲ取還ス○是ヨリ先王其  
弟アレクサンダーノゼオフライヲ逐テ其地ヲ奪フゼ  
オフライ逃レテナレテスニ至ル后ゼオフライ  
ノ死スルニ及ヒグッドマニールノ侯コナント云フ  
者又ナレテスヲ奪ヒシカ是ニ至テ王ノルマニ  
ジールニ至リ又コナレテ逐テナレテスヲ奪ハニ  
トス適佛王ルイス第七世ノコナレテ援クルニ  
因テ兵結テ連年解ケス一千百六十年和成リ佛  
王ノ女ヲ以テ王ノ長子ヘレリニ妻ハレコナ  
レノ女ヲ以テ其第三子ゼオフライニ妻ハレ王

遂ニブレタニ一得テ凱旋ス○一千百七十二  
 年王愛倫ニ入テ其國ヲ服從ス愛倫ハ古史ニ詳  
 ナラス紀元後四五百年文學既ニ開ケ英國サク  
 ソニスノ為ニ攻ラレレ頃僧侶學士亂ク避クテ  
 此ニ來リ住スル者多シ王ノ時ニ當テ其國五分  
 シテ各王アリ一千百六十九年レインストル  
 一國ノ王デルモット其隣國ニ逐レテ國ヲ失ヒ英  
 ニ來テヘンリーノ援ヲ請フ王之ヲ援ケスト雖  
 デルモットニ許シテ自英人ヲ募ラシムデルモット  
 是ニ於テペンブルクノ侯ストロングボウ及其

他ノ貴族數人ト共ニ愛倫ニ歸テ國ヲ恢復セレ  
 カ遂ニ他ノ四國ヲ併一セントレストロングボ  
 ウト共ニ諸方ヲ攻畧シテ境土漸ク廣シ其後ス  
 トロングボウ遂ニデルモットノ女ヲ娶リ其死ニ  
 及テ國ヲ嗣キシカ既ニシテ英ニ來テ悉其地ヲ  
 王ニ獻ス王是ニ於テ其一分ヲストロングボウ  
 ニ與ハ遂ニ自兵船四百艘ヲ率キテ愛倫ニ入り  
 テハ首長王ノ來ルヲ聞キ戰ハスシテ悉屈服  
 シ全島是ヨリ英ノ版圖ニ歸ス○封建ノ間亂賊  
 屢起テ位ヲ篡ヒ國ヲ傾タム風習アリ故ニ父ノ

生前其子ニ即位ノ禮ヲ行ハシメテ以テ後嗣ヲ固クス王亦此風ニ倣ヒ其子ヘンリーヲシテ權ニ位ヲ踐シメシカ既ニシテヘンリー速ニ政權ヲ握ラシコトヲ欲シ一千百七十三年佛蘭西及蘇格蘭ノ王ト通シテ竊ニ父ヲ廢セシユトヲ謀ル王ヘンリーノ行ニ常ニ異ナルヲ怪ミ其侍臣ヲ責メテ悉ク之ヲ逐フ是ヨリヘンリー危懼ヲ懷キ遂ニ其二弟リチャルド及ゼオフライト共ニ佛蘭西ニ逃レテ兵ヲ舉ケ佛王ハノルマンジヨリ蘇王ハコンベルランドヨリ一時ニ英ヲ襲フ然

レ正一千百七十五年蘇王ノ擒モラレシニ依テ其計略皆破レ佛王亦遂ニ和ヲ請ヒケレハ王蘇格蘭ノ王ヲ許シテ其國ニ歸ラシメ又其年少ノ故ヲ以テ三子ノ罪ヲ免レテ問ハス○王ヘンリーノ反逆ハ其友ノ宜シカラサルニ依レリトテ是ヨリ常ニ坐右ニ置テ嚴ニ之ヲ抑制ス久シクシテヘンリー堪フルコト能ハス種々辭ヲ設ケテ膝下ヲ去リシカ是ヨリ其行狀復舊ニ還リ後又リチャルドト事ヲ争ヒシカ王獨リチャルドヲ助クト謂テ復タ反ス然レハ心神悩亂シ兵ヲ舉ケ

テ王ニ迫ルニ及ヒ終ニ熱ヲ病テ死ス時ニ一千  
 百八十三年ナリテハ罪ヲ謝シ王ノ一タヒ来テ已  
 ヲ見シコトヲ請フ然レニ王其偽ナラシコトヲ  
 疑テ往カス唯指環ヲ賜テ之ヲ慰藉スハシ  
 涙ヲ流シテ環ヲ受ケ侍臣ニ命シテ己ヲ灰中ニ  
 置カレシメ首ニ縊索ヲ懸ケテ悔悟ノ意ヲ表ス後  
 王其死状ヲ聞テ自往カ  
 ○第三子リチャルド剛ニ  
 シテ勇ヲ好ム時人名ケテ獅子ト云フ此頃ゼ  
 サールム再土耳其ノ手ニ落チテ十字軍又起リ  
 リチャルド主トシテ之ニ加ハリシカ王ノ其弟  
 シテ寵愛スルコト己ニ超ユルヲ見テ其不在ヲ  
 幸トシ獨寵ヲ專ニスルヲ嫉ミ携ハテ共ニパレ

スチンニ至ラント請フ然レトモ王之ヲ許サス  
 リチャルド即怒テ又王ニ背キシンヲ懲懲レテ己  
 ニ與セシム王素シシテ愛スルコト甚切ナリ其  
 リチャルドニ與スト聞テ大ニ悲ミ積鬱病ヲ成レ  
 テ死ス時ニ一千百八十九年ナリ王年五十七在  
 位三十五年五男アリ長ヲ宰ルムト云フ幼ニ  
 シテ死ス次子ヘンリー第三子リチャルド位ヲ繼  
 ク第四子ゼオフライ一千百八十六年佛國ニ於  
 テ武ヲ演スルニ當リ傷ヲ受ケテ死ス遺腹ノ子  
 アリアルジュールト云フ第五子ヲシントス

改正  
 五  
 大

リキルド第一世 一千八百八十九年九月三日王位  
 二即ク王其父ノ死ヲ聞テ大ニ悲シ自其墓ニ至  
 テ罪ヲ謝ス位ニ昇ルニ及テ宰相重臣皆其父ノ  
 舊ニ循フ初王及其兄ヘンリーハ共ニ反テ謀リ  
 レハ實ニ其母エリーノルノ竊ニ之ヲ懲懲セシ  
 ナリ三子ノ佛ニ逃ルハ當テエリーノル又之  
 ト共ニ行カントセレカ事露レテ是時尚幽閉ノ  
 中ニ在リ是ニ至テリキルド之ヲ獄ヨリ出シ孝  
 養シテ身ヲ終ヘシム〇一千八百九十年王ツヒニ  
 意ヲ決シテパレンスチンニ至ルノ備ヲ為シ同年

九月十四日多利海ニ至テ佛王ヒッ  
 ト合セシカ時己ニ寒ニ向フヲ以テ軍ヲ進メス  
 明年ヲ待テ亞細亞ニ向ハント議スリキルド頗  
 傲慢ニシテ人ヲ凌クト雖亦勇ニシテ且寛宏ノ  
 器局アリヒッパハ其性倨傲ナルノミチラス奸  
 黠ニシテ詭詐多シ是ヲ以テ二人常ニ相和スル  
 コト能ハス又リキルドノ幼時其父ヘンリーリ  
 チャルドノ為ニ佛王ノ妹ヲ娶ラント約セシコト  
 アリ然ルニ其死ニ及テリキルド約ヲ踐マスナ  
 バルレ以多利中一ノ王女ベレンガリヤヲ娶リ

改正  
 長  
 六

是歳之ヲ携ヘテメシナニ至リケンハ佛王大ニ怒リリキルドニ告ケスシテ先發ス○尋テリキルドモ亦バレンガリヤト共ニ海ニ航シ其途中シブルス島ヲ取リ此地ニ上陸レテ婚儀ヲ整ヘ又進テアクレニ至リ再佛王ト合スアクレハパレスチシ西岸ノ邑名ニシテ其前二年ヨリ耶蘇教徒ノ兵之ヲ圍ミシカ久シクシテ抜クコト能ハスリキルドノ来ルニ及テ其勢再振ヒ晝夜ヲ分タス攻撃シテ終ニ之ヲ下ス時ニ一千百九十年ナリ○佛王ダレナヲ出シヨリ其怒未解ケ

ス又アクレヲ圍ムニ當テリキルドノ勇名己カ右ニ出ツルヲ嫉テ是歳終ニ獨佛蘭西ニ歸ル其去ルニ臨テボルゴレンジーノ侯ヲ留メテ將トシ遺囑シテ百方リキルドノ功ヲ妨ケシム○同年リキルド進テジッハニ至リ土爾其ノ將サラジント戦ヒ朝ヨリ暮ニ至テ終ニ大ニ之ニ勝ツ既ニシテサラジニアスカロンニ在テ敗兵ヲ集ムト聞キ直ニ進テ又之ヲ敗ラントス然レトモ佛將陰ニ之ヲ沮礙スルニヨリテ逗撓スルコト殆二月是歳冬始メテゼヒサレムノ近傍ニ達ス

然レトモ此ニ至テ佛兵又之ヲ圍ムコトヲ欲セ  
ス王大ニ怒ルト雖施スヘキ策ナシ終ニ又退テ  
アスカロンニ歸ル○初ヒルブノ國ニ歸ル時リ  
去ルド其心ヲ疑ヒ之ヲ要シテ歸後英ノ土地ヲ  
襲フコト無<sup>カ</sup>ラント誓ハシム然レトモヒルブ佛  
ニ至テ英國ノ和セサルヲ聞キ其隙ニ乘シテ恨  
ヲ報セントトリ去ルドノ弟<sup>ウ</sup>ニ説テ内應セシ  
ム然レトモ<sup>ウ</sup>其母ニ制セラレテ之ニ從フコ  
トヲ得スヒルブ又ノルマンジ<sup>ー</sup>ヲ攻メ<sup>レ</sup>ト謀  
リモカ佛國ノ貴族王ヲ惡テ其命ヲ奉セス一千

百九十二年四月リ去ルドアスカロンニ在テ是  
等ノ事ヲ聞キ遂ニ歐羅巴ニ歸ラント決ス適<sup>ジ</sup>  
ツハサラ<sup>ラ</sup>ジ<sup>ン</sup>ノ為ニ圍マ<sup>レ</sup>レ危急ナリト聞テ直<sup>チ</sup>  
ニ赴テ之ヲ救ヒ大ニ土爾其ノ兵ヲ敗テサラ<sup>ラ</sup>ジ  
レト寢兵ノ約ヲ定メ同年十月遂ニ歸路ニ赴ク  
○リ去ルドノ船アドリヤ<sup>チ</sup>海ニ至テ颶風ノ  
為ニ覆サル是ヨリリ去ルド獨<sup>リ</sup>狀貌ヲ變シテ日  
耳曼ニ入り一千百九十二年十二月ビ<sup>ー</sup>ン<sup>ナ</sup>  
利<sup>ノ</sup>近傍ニ至ル適一卒嘗テア<sup>ク</sup>レニ於テ王  
ヲ識レル者有テ之ヲ埃地利ノ侯ニ告ク侯嘗テ



王ト共ニアクレヲ下スニ當テ王ノ為ニ其旗ヲ  
蹂躪セラレレ恨アリ是ヲ以テ大ニ悦ヒ王ヲ執  
ハ後又之ヲ日耳曼ノ帝ニ獻ス帝鐵鎖ヲ以テ王  
ヲ縛レ之ヲ獄ニ繫クコト一年餘ナリ一千百九  
十四年ニ至テ英人十五万銀錢ヲ以テ王ノ身ヲ贖フ○王英ニ歸テ後四月ニシテノルマ  
ンジョーニ至ル初王ノ日耳曼ニ於テ擒ニセラレ  
シ時其弟王既ニ日耳曼ニ死スト流言セシ  
メ己位ヲ篡ハント謀リ佛王亦兵ヲ起シテノル  
マンジョーヲ侵セリ後日耳曼帝ノ王ヲ縱スニ及

テ二人大ニ懼レ帝ニ賄テ尚王ヲ拘留セシコト  
ヲ請フ王ノ歸ルニ當テ佛王復ノルマンジョーヲ  
襲ハントス王自ラ行キレハ是等ノ事ニ報スルナ  
リ是ヨリ五年ノ間兩國ノ兵結レテ解ケス○一  
千百九十九年王レモゼスノ侯ノ富ヲ聞テ其國  
ヲ得ントレ侯ノ肯セサルヲ怒テ其城ヲ圍ミ三  
月廿六日自ラ地形ヲ檢スルニ當テ城兵ノ為ニ射  
ラレ四月六日死ス時ニ年四十三在位十年其間  
英ニ在ルコト僅ニ四月ト云フ王子ナレ始其甥  
アルジョールヲ立テ、嗣ト為ントセリ然レトモ

其母エリールノルアルヰールノ母ト相惡キラ以テ王ニ勸メテ位ヲ其弟ヰンニ讓ラレハ

ヰン 一千百九十九年五月七日王空ストミンス

トルニ於テ即位ス○アルヰールハ王ノ兄ノ子ナルヲ以テ陰ニ位ヲ得ント期セシカヰン

スルニ及テ大ニ望ヲ失シ佛王ヒリッパノカヲ假

テ英ニ入ラントス佛王亦悅テ之ヲ諾ス然レト

モヰン方便ヲ以テ佛王ト和ヲ結ヒヰンノ姪ヲ

以テ佛王ノ子ニ妻レ佛王亦アルヰールヲヰン

ニ與フ其後三年ニレテ一千二百二年アルヰール

ル復佛王ノ援ヲ請テポイトーニ入りミラベル

ノ城ヲ圍テ殆<sub>ト</sub>之ヲ拔カントスヰン之ヲ聞テ急

ニ来リ救ヒ戰テアルヰールヲ擒ニス後英ニ歸

テ密ニ之ヲ刺殺セリト云フ○一千二十四年佛

王ノルマンヰーニ入テ其州ヲ奪フヰン性残忍

ニレテ且詐術多シアルヰールヲ殺シテ後ハ國

人皆惡テ其命ヲ奉セス是ヨリ後ア<sub>ン</sub>ヰ<sub>ー</sub>マイ

ントーライ<sub>ン</sub>等ノ州皆續テ佛王ノ為ニ奪ハル

ヘンリー二世ノ世ニ當テ英國ノ領地佛國ノ

中ニ在ル者殆其三分ノ一ニ居リシカヰンノ世

ヲ終フルニ及テ其殘ル者幾許モ無シ○耶蘇ノ  
 弟子ニセントペートルト云フ人アリ始テ羅馬  
 ニ住セシヨリ其後世々其教派ノ中名嚴アル者  
 フ選テ位ヲ繼カシメ名ケテ羅馬ノ法王ト云フ  
 後世ニ至ルニ及テ天ノ管鑰ヲ持スト稱レテ頗  
 威福ヲ為シ各國ノ帝王ト雖之ニ抗スルコトヲ  
 得ス<sup>ヰ</sup>ンノ世ニ當ル法王ヲ<sup>イ</sup>ンノ<sup>ー</sup>セント第  
 三世ト云フ一千二百八年法王英人<sup>ラングトン</sup>  
 ト云フ者ヲ選ミテ<sup>カン</sup>テ<sup>ル</sup>ボ<sup>リ</sup>リ<sup>英</sup>ノ<sup>地名</sup>ノ<sup>教</sup>大  
 長ト為ントセシニ<sup>ヰ</sup>ン<sup>之</sup>ヲ肯セス法王乃怒テ

英國ノ法教ヲ禁ス法教ヲ禁スルハ法王人ヲ脅  
 ル國ハ盡ク寺院ヲ閉テ神拜ヲ然レトモ<sup>ヰ</sup>ンノ  
 廢レ又死屍ヲ葬ルコトヲ得ス甚之ヲ意トセサルヲ見テ更ニ英國ノ人民ニ令  
 シテ君臣ノ盟ヲ解シメ又英王ヲ法教ノ敵ナリ  
 トレ諸國ニ令レテ英國ヲ攻伐セシム○一千二  
 百十二年佛王法王ノ命ヲ奉シ大ニ戰艦ヲ熾シ  
 以テ英ヲ攻メントス法王故英王ヲ惡ムト雖モ又  
 佛王ノ權ヲ増スヲ欲セス故ニ竊ニ使テ英ニ遣  
 テ曰ク王苟モ法王ノ意ニ從ハ、法教ノ禁ヲ解  
 キ又佛王ニ令レテ攻伐ヲ止メント時ニ王惶懼

改正英史 卷二 十一

シテ他事ヲ顧ミルニ違フラス其命ニ從テ禍ヲ  
 免レント請フ使者乃王ノ冠ヲ奪ヒ更ニ法王ノ  
 命ヲ以テ之ヲ王ニ與ヘ永ク羅馬ノ屬國ト為シ  
 テ年々貢金ヲ獻セシム王冠ヲ脱シテ使者ニ捧  
 クルニ當テ使者足ヲ舉ケテ之ヲ蹴タレントモ王  
 怒ルコト能ハス○佛王法王ノ旨ヲ赦スヲ聞  
 テ大ニ怒ルト雖又法王ノ命ニ背テ英ニ入ルコ  
 ト能ハス其聚ムル所ノ兵ヲ率キテフランドル  
 スニ入り其國ヲ奪ハントス是ニ於テ英王フラ  
 ンドルスヲ援ケテ大ニ佛兵ヲ敗リ遂ニ進テ佛

國ニ入ラントス然レトモ貴族皆從フコトヲ好  
 マス王乃外國ノ兵ヲ雇ヒテ日耳曼ノ帝ト約レ  
 王ハポイトリヨリ帝ハ涅達蘭ヨリ一時ニ兵ヲ  
 進メシカ適帝ノ軍敗ルニ逢テ事ヲ遂ケス王  
 佛王ト寢兵ヲ約レテ歸ル○是ヨリ先歴代ノ間  
 君權愈專横ニシテ貴族平日ノ家事ニ至ルマテ  
 自恣ニスルコトヲ得ス又官衙ニ於テ訟獄ヲ賣  
 リ多ク金ヲ納ル者ハ其曲ヲ許シテ問ハサル  
 等ノ弊アリ之ニ加フルニ旨ノ暴惡日ニ甚シ  
 クシテ貴族ヨリ平民ニ至ルマテ皆生ヲ聊マス

王倫敦ノ僧尼ヲ會シ其集ルニ及テ俄ニ之ヲ禁  
錮シ其巨數ノ金ヲ納ムルニ至テ乃之ヲ放シ常  
ニ之ヲ以テ金庫ヲ充タスノ一計トス王又嘗テ  
猶太教ノ人某ニ命シテ金ヲ獻セシメシニ其人  
命ニ從ハス王乃怒テ之ヲ獄ニ下シ日ニ其齒ヲ  
抜クコト一枚七日ニシテ其人終ニ金ヲ納ム此  
ノ如キコト久シクシテ國人堪フルコト能ハス  
王ノ沸ニ在ルニ當テ貴族相議シ六十三條ノ法  
ヲ書シテ嚴ニ王權ヲ抑制シ其歸ルニ及ヒ王ヲ  
要シテ之ニ誓ハシム王兵力ヲ以テ之ヲ拒マン

トスレトモ王ヲ助クル者ナシ一千二百十五年  
貴族大ニリニメードト云フ野ニ會シ遂ニ王ニ  
迫テ誓ヲ立ツ其書中言ヘルコトアリ曰君主故  
ナクシテ人ノ身體貨物ヲ害ス可カラス又罪人  
ヲ糾彈スルニ必其罪人ト同級ノ人ヲ以テ其罪  
ノ有無ヲ證セシムヘシ又議院ニ依ラシテ租  
稅ヲ賦ス可カラスト此書ヲ名ケテマダグナ、カル  
ト云傳ヘテ之ヲ英國政體ノ大本トス○王既  
ニリニメードヨリ歸リ鬱悒トシテ樂マス常ニ  
貴族ニ報セント思ヒ勉メテ兵卒ヲ親近シ其歡

ヲ結ヒ終ニ少許ノ兵ヲ舉ケテ貴族ヲ襲フ貴族  
 故ト王ノ無能ヲ侮テ備ヲナサス是ニ至テ大ニ驚  
 キ使ヲ佛國ニ馳セテ佛王ノ援ヲ請ヒ其長子ル  
 イスヲ立テ、英王ト為ント約ス佛王大ニ悦ヒ  
 即ルイスニ兵若干ヲ授ケテ英ニ入ラシム一千  
 二百十六年五月ルイスサント宰ツチニ上陸シ  
 ロタストル城ヲ取り六月進テ倫敦ニ入ル然レ  
 トモ英ノ貴族稍佛人ヲ引入ル、ノ過ヲ曉リル  
 イスヲ去テ王ニ歸スル者多シ是ニ於テ王ノ軍  
 再振ハリ○王此軍ヲ率キテリシコルンシール

ニ至ラントシ其途中ヨシト云フ渡口ニ至テ海  
 潮ノ為ニ悉其糧米輜重ヲ失フ是ヨリ先王屢不  
 幸ニ逢テ心身大ニ衰ヘシカ是ニ至テ憂悶病ヲ  
 生シ十月十七日ユールク城ニ於テ終ニ死ス  
 時ニ年四十九在位十八年二男三女アリ長子ハ  
 シリール位ヲ嗣ク

ヘンリー三世 一千二百十六年十月十八日王

グローストルニ即位ス時ニ年八歳ペンブ  
 ノ侯政ヲ攝シ又兼ネテ王ニ傳タリ侯賢ニシテ  
 且ッ勇アリ再マダグナ、カルタニ擗ヒ其法制ニ從テ

政ヲ行フ是ニ於テ諸侯ノ叛セル者多ク歸順レ  
 ルイスノ兵愈減ス〇一千二百十七年五月十九  
 日ペンブゴクノ侯ルイストリンコルニ戦テ  
 之ヲ破リ同年八月二十一日佛ノ戦艦援兵ヲ載  
 セテド~~ル~~カ~~ル~~ニ至リシカ又英人ノ為ニ敗ラル  
 後ルイス倫敦ニ在テペンブゴクノ為ニ圍マレ  
 九月十一日終ニ和ヲ請テ英ヲ離ル〇一千二百  
 十九年ペンブゴクノ侯病ニ依テ死シヒーバル  
 ト、デ、ボルフ及ペーパートル、デ、ロをス代テ政ヲ攝ス  
 〇一千二百二十三年壬午十六攝政ヲ廢レテ自

政ヲ視ル王性仁柔ニシテ斷ナレ是ヨリ常ニ貴  
 族ノ為ニ制セラレ〇一千二百十四年佛王ヒ  
 ヲプ死シルイス第八世之ニ嗣~~ハ~~既~~ニ~~テルイ  
 ス亦死シテ其子ルイス第九世代立ス然~~レ~~モ  
 其年猶幼ナルヲ以テ其母政ヲ攝スヘンリー一此  
 機ニ乘ンテノルマンジーヲ復センコトヲ欲シ  
 同三十年兵ヲ率キテ佛ニ入りシカ行軍律ナク  
 戦敗レテ逃歸シリ〇一千二百三十六年王プロ  
 ベンスノエリトノルヲ娶リ其親族ヲ登庸シテ  
 寵賚極メテ多ク屢金ヲ議院ニ請フ國人是ヨリ

2.202020

改正 卷二 十五

漸ク王ヲ厭フ○パートルト、曰ク、吾人ニシテ其攝政タリレトキ其國人ノ高位ニ列セルモノ極メテ多カリレカハ貴族政府ノ權ノ外國人ニ歸スルヲ見テ皆既ニ不平ナリカ  
王エリノルヲ娶ルニ及テ怨望スル者愈多シ  
王又費用ノ支ヘス議院ノ命ヲ奉セサルヲ以テ  
屢貴族ヲシテ金ヲ獻セシメ貴族頗之ヲ厭苦ス  
此頃王兵ヲチーブルスニ用キルコトアリテ其  
軍資ヲ得ンコトヲ欲シ一千二百五十八年公會  
ヲ開テ五月二日王議院ニ入リシニ議員皆甲冑

ヲ擐キ兵仗ヲ執リタリ王見テ大ニ驚キ其故ヲ  
問フ議員皆答ヘテ曰臣等王ヲ執ヘントスルニ  
ハ非ス王今金ヲ臣等ニ得ンコトヲ欲ス臣等亦  
王ヨリ其報ヲ得ントスルノミ王屢弊政ノ改革  
ヲ約スレトモ一モ其實效ヲ見ス臣等更ニ嚴律  
ヲ立テ王ヲシテ再過ヲ犯スコト無ラレメ且能  
ク民苦ヲ救フ者ヲ選テ之ニ國家ノ權ヲ與ヘン  
トスル也ト王大ニ懼レテ其請ニ從ヒ同年六月  
十一日再議院ヲオキスホルドニ集メテ其員中  
ヨリ二十四人ノ貴族ヲ選ミシモンテ、モンストホ



ルトト云フ者ヲ其長トシテ之ニ國政ヲ執ラシム  
 ム○貴族既ニ權ヲ得テ惡風ヲ改革スト稱シ多ク  
 ク私利ヲ營ミ各自其欲スル所ニ從テ事ヲ行フ  
 カ故ニ政令紊亂シテ民從フ所ヲ知ラス此ノ如  
 キコト三年終ニ又國人ノ為ニ厭苦セラル王此  
 機ニ乘シテ再權ヲ握ラント謀リ倫敦ニ據リ岩  
 柵ヲ設ケテ之ヲ守ル是ヨリ後又三年ノ間争擾  
 絶ユル時ナシ此時佛王ルイス第九世賢ニシテ  
 且德行アリ其間ニ居テ勸解セレカ王トモント  
 ホルトト皆之ニ從ハス終ニ一千二百六十四年

戰起リ兩軍レ空スニ會レ王ノ兵敗レテ王其弟  
 リキルドト共ニ擒ニセラル是日王軍ヲ分ケテ  
 三隊トシ世子エドワード其一ヲ令シリキルド  
 其子ハンリート共ニ其二ヲ令シ其三ハ王親ラ  
 之ヲ令ス兵既ニ合スルトキ世子奮戰シテ敵ノ  
 一隊ヲ敗リ北クルヲ追テ戰場ヲ距ルコト數里  
 歸リ來レハ王既ニ擒ニセラル世子大ニ怒リ再  
 戰テ王ヲ奪ヒ返サントセシカ兵士皆疲レテ戰  
 テコト能ハス世子乃チハンリート共ニ自縛ニ就  
 キ其父ニ代ラント請フモントホルト乃チ二子ヲ

執へ其父ヲ併セテ之ヲ幽閉ス○モントホルト  
 既ニ王父子ヲ獲テ復顧慮スル所ナレ事コトニ  
 王ノ命ヲ矯テ私欲ヲ逞シクシ多ク貴族ノ土地  
 城砦ヲ奪ヒ遂ニ位ヲ竊マントスモントホルト  
 又貴族ノ己ヲ嫉ムヲ知リ下民ノ心ヲ得テ之ニ  
 抗セント一千二百六十五年一月公會ヲ設ケ平  
 民ヲ許シテ其賞中ニ加ラシム英國ノ議院ニ下  
 院アルハ是其始ナリ  
 按スルニサクソンノ代ニ  
 既ニ議院ニ類セルモノアリ常ニ政事ニ與リ法  
 律ヲ議定ス然レトモ其制度ノ詳ナルハ得テ知  
 ルハカラス卒ルレム第一世ノ後諸侯ノ大ナル  
 ト称レテ一ノ國會アリ其議賞ハ諸侯ノ大ナル

者ト高僧トナリニシテ時トシテ小諸侯ヲモ之  
 ニ加フルコトアリモントホルトノ時ニ至テ始  
 テ州及府邑ニ命シテ一州一都府毎ニ各二人ヲ  
 選テ出サシム始ハ王ヨリ平民ニ至ルマテ皆一  
 室ニ會セシカ後分レテ二トナリ王ト貴族ト高  
 僧ト下院ト合称シテ上院ト云ヒ平民ノ代賞ヲ称シ  
 コトナレリ○モントホルトノ議賞ヲ聚メシ  
 ハ其主義議院ノ名ヲ借テ私曲ヲ成ント為ニ在  
 ラ見テ議賞逃レテ歸リ去ル者多シグロースト  
 ルノ侯ハ故モントホルトト親善ニシテモント  
 ホルトノ暴威ヲ恣ニスルヲ得シハ多ク侯ノ力  
 ニ依リシカ侯亦モントホルトノ己ヲ凌クヲ見  
 テ竊ニ不平ヲ抱キ是ニ至テ復國ニ歸リ城障ヲ

改正  
 卷二  
 十八  
 了

修シテ戦争ノ備ヲ為ス時ニ世子エドワード猶  
 モントホルトノ所ニ在リグローストール世子ヲ  
 得テ之ヲ奉センコトヲ欲シ竊ニ駿馬一匹ヲ贈  
 リ且投クルニ逃ハシノ計ヲ以テス世子其計ニ從  
 ヒ病ト偽テ閉居スルコト數日病少シク愈ユト  
 稱シモントホルトニ請テ野外ニ遊行ス世子始  
 ハ故ラニ緩鑣シテ病後馬上ニ勝ヘサル狀ヲ為シ  
 レカ開豁ハ地ニ至テ警護ノ兵ニ請テ互ニ馬ヲ  
 競ハシメ其馬ノ悉ク疲ルハヲ見テ直ニ馬ヲ飛  
 シテ逸去ス衛兵大ニ驚テ之ヲ追ヘトモ及フコ

ト能ハス世子終ニ威爾斯ニ至テグローストール  
 ト合ス貴族王ニ志ヲ通スル者此ニ至テ来リ聚  
 ル者多シ○モントホルトハ世子ノ逃ハシタル  
 ヲ聞キ王ニ迫テ之ヲ討スル命ヲ請ヒ又其子シ  
 モンヲ倫敦ヨリ迎ヘテ共ニ戦ヲ起サント議ス  
 世子之ヲ聞テシモンヲ途中ニ遮リケニルウル  
 スニ戦テ其兵ヲ破リ其旗ヲ奪テ之ヲ陣中ニ樹  
 テ直ニ進テモントホルトニ向フモントホルト  
 未ダシモンノ敗報ヲ聞カサルニ世子ノ軍既ニ近  
 キニ在リ其旗ヲ望ミ見テ援兵ノ来ルナリトシ

テ大ニ悦ビシカ既ニシテ其世子ナルヲ知リ又大ニ驚キ叫テ曰ク嗚呼我死ナント一千二百六十五年五月四日兩軍大ニエバスハムニ戰ヒモントホルト其子ヘンリート共ニ敗死ス是日モントホルト王ヲ縛シテ陣前ニ立タシム戰鬪ナルニ及テ世子ノ兵其王ナルヲ知ラスシテ之ニ傷ツケ又其頭ヲ截ラントセシニ王急ニ叫テ曰我ハ幸ン左ストルノヘンリート兵卒之ヲ聞テ大ニ驚キ急ニ扶ケ起シテ戰場ノ外ニ誘去ス王之ヲ以テ恙ナキコトヲ得タリ○モントホ

ルト死シテ貴族ノ黨多ク潰ユト雖アダムゴルドント云フ者未ダ王ニ降ラス世子兵ヲ率テ其城ヲ圍ミ自進テ濠ヲ超エゴルドント闘テ之ヲ馬ヨリ墜レ終ニ其城ヲ陷ル○一千二百七十年世子十字軍ニ加リア細亞ニ至テ大ニ勇名アリ土爾其人皆怖レテ敢テ戰ハス曾テ刺客ヲ用キ世子ヲ刺サント謀リシカ事成ラス世子却テ其劔ヲ奪ヒ刺客ヲ擊殺ス○一千二百七十二年王死ス時ニ年六十四在位五十七年長子エドワルド位ヲ繼ク

エドワルド第一世ヘンリー三世ノ死スル時  
 王尚十字軍ニ從テ英ニ在ラス歸途ニシリ  
 至テ其報ヲ得タリ然レトモ途ニシテ佛蘭西ニ  
 過リ其他諸方ニ滯留シテ一千二百七十四年五  
 月始テ英ニ歸リ父ノ位ヲ繼ケリヘンリー第三  
 世末年ニ至テ老耄シ政令整ハス盜賊横行シ騷  
 動屢起リレカ王位ニ昇テ市邑巡邏ノ法ヲ立テ  
 制度ヲ更張シ須臾ニレテ國內清肅ナリ○王ノ  
 時ニ當テ愛倫ハ既ニ英ノ版圖ニ入ルト雖不列  
 顛ノ内ニ猶蘇格蘭及威爾斯ノ二國アリ威爾斯

ハサクソンノ頃ヨリ既ニ英ノ屬國ト稱スト雖  
 別ニ古來ノ王統アリテ反覆常ナラス又蘇格蘭  
 ハ全ク獨立ノ一王國ニシテ英ノ交際モ常ニ隣  
 國ノ禮ヲ以テセリ王夙ニ此二國ヲ併一セシム  
 トヲ欲スルノ志アリシカモントホルトノ亂ニ  
 威爾斯之ニ與シ王ノ位ニ即クニ及テ又屢條約  
 ヲ破リシカハ王之ヲ以テ口實トレ終ニ兵ヲ舉  
 ケテ威爾斯ヲ討テ威爾斯人王ノ来ルヲ聞キ亦  
 兵ヲ聚メテ之ヲ逆ハ一千二百八十二年十二月  
 王ノ兵ヲ襲テ却テ大ニ敗レ國王レ空ルリシ戰

死シ其子ダビト擒ニセラルル其後王ダビトヲ殺  
 シ其首ヲ倫敦ニ懸ケ又其屍ヲ四分シテ之ヲ四  
 所ニ曝スト云フ王威爾斯人ヲ會シテ言テ曰ク  
 我一王ヲ選テ汝カ輩ニ與ヘントス其人ハ威爾  
 斯ノ産ニシテ曾テ英語ヲ話スルコト能ハスト  
 威爾斯人此時英國ニ合併セラレシコトヲ憂ヒ  
 シニ王ノ其國人ヲ立ツル云フヲ聞テ大ニ悦フ  
 既ニシテ王其子エドワルドヲ出シテ之ニ示ス  
 時ニエトワルド威爾斯境内ニ生レテ猶數日ナ  
 リ國人之ヲ見テ又大ニ望ヲ失フ○王既ニ威爾

斯ヲ從ヘテ又蘇格蘭ニ及ントス初王ノ妹蘇王  
 アレキサンドル第三世ニ嫁シ一女マルガレット  
 ヲ生テ死シマルガレットノ王ニ嫁レ又  
 一女ヲ遺シテ死ス一千二百八十六年アレキサ  
 ンドル死スルニ及テ子無シノル空ノ王ノ女  
 其外孫ナルヲ以テ位ヲ受ク是ニ至テ王謂ヘラ  
 ク其子エドワルドノ為ニ此女ヲ娶リ以テ其子  
 孫ニ傳ヘハ蘇國ハ居ナカラ併スヘレ依テ之ヲ  
 ノル空ノ王ニ請テ其議既ニ定リシカ一千二  
 百九十年其婚儀ヲ成サント女子蘇格蘭ニ航ス

ル途中病ニ罹リオルグ子ースニ至テ死ス是ヨ  
 リ後蘇格蘭大ニ亂レテ位ヲ争フ者十三人其内  
 ロバルト、ブルース、ジョン、バリオルノ二人血統最  
 近シ此頃エドワルド明斷ニシテ且公正ナルヲ  
 以テ世ニ稱セラレ嘗シニリニ騷亂ノ起リレ  
 時其争ヲ決セシコトアリ二人亦其例ニ倣テエ  
 ドワルドニ訴フエドワルド竊ニ之ヲ悦ヒ直ニ  
 大軍ヲ率キテ蘇格蘭ノ境ニ臨ミ先國人ニ迫テ  
 其政權ヲ握リ又英ノ兵ヲ以テ悉要害ノ地ヲ守  
 ラシメ其後二人ノ訴ヲ聞テ終ニバリオルヲ立

ルニ決ス然レトモバリオル柔弱ニシテ王ノ為  
 ニ制セラレ位ヲ得シト雖モ其名アルノミニ過キ  
 ス王之ヲ遇スルコト稚兒ノ如シ是ヨリ王ノ心  
 術漸ク形跡ニ顯ハル時ニ一千二百九十二年十  
 リ〇一千二百九十三年英佛ノ船卒事ニ依テ争  
 フ生シ遂ニ相戰佛ノ船隊大ニ破ラル佛王之ヲ  
 聞テ大ニ怒リ其翌年英王ヲ欺テギーン子ノ州  
 ヲ奪ヒ又潛ニバリオルニ通レテ英ヲ襲ハント  
 ス英王之ヲ聞キ遂ニ兵ヲ率キテ蘇格蘭ニ至リ  
 一千二百九十六年ベルネツキヲ取り又バリオ

ルトドンバルニ戦テ大ニ之ヲ破リバリオルヲ  
 執ヘテ倫敦ニ幽ス。○蘇國バリオルノ執ヘラレ  
 テヨリ英ニ從フニ似タリト雖國人未ダ服セス此  
 頃卒ルレム、ワルレースト云フ者アリ英ノ官吏  
 ノ為ニ其家ヲ毀タレ又其妻ヲ殺サレテ大ニ英  
 人ヲ恨ミ一千二百九十七年其國ヲ恢復スト唱  
 ハテ兵ヲ舉ク是ニ於テ國人悦テ之ニ加ハル者  
 多シ王乃チ自十萬ノ兵ニ將トシテ再蘇格蘭ニ入  
 リシカ是ヨリ八年ノ間互ニ勝敗アリ一千三百  
 五年ワルレース終ニ王ノ為ニ捕ヘラル。○其後

國人更ニロベルトブルースノ子ヲ立テ、王ト  
 シ尚英ニ抗ス一千三百六年王又大舉レテ蘇格  
 蘭ニ入ル誓テ曰此行全國ヲ服從スルニ非レハ  
 再英ニ歸ラシト然レトモブルース自、執ノ敵セ  
 サルヲ知テ山間ニ逃避シ出沒其所ヲ知ラシメ  
 ス英軍之カ為ニ惱マサレ王大ニ怒ト雖施スヘ  
 キ策ナレ終ニ大兵ヲ以テ全國ヲ剽盡セントシ  
 令ヲ下シテ盡ク英國ノ兵ヲ發シカルリスレニ  
 會セシム然レトモ同年七月二日王カルリスレ  
 ニ至ル比、病ヲ得テ此地ニ留ルコト二日適、王既

改正 三 二 一



ニ死スト流言スル者アルニヨリ又強テ軍ヲ發  
 セシカ七月五日病愈劇シク進ムコト能ハ  
 ス路傍ニ幕ヲ張テ療養スルコト七日終ニ幕中  
 ニ死ス時ニ年六十九在位三十五年ナリ王容貌  
 魁偉ニシテ舉止甚威望アリ又其父ニ事ハ妻子  
 ヲ遇シタル法皆鑑トスルニ足レリ然レトモ全  
 島ヲ合一スルカ為ニ終身干戈ヲ事トセル故勇  
 ハ暴虐ニ流レ智ハ奸猾ト為リテ人民其害ヲ蒙  
 ルコト亦多シ○王六男十一女アリ三男六女皆  
 王ニ先タチテ死シ第四男エドワルド位ヲ嗣ク

エドワルド第二世 一千三百七十七年七月八日王カ

ルリスレニ於テ即位ス初エドワルド第一世ノ  
 死スル時未蘇格蘭ヲ統一セサルヲ憾ミ遺命シ  
 テ曰ク吾死セハ屍ヲ軍中ニ奉シテ北征レ全國  
 ヲ戡定スルニ非レハ必ス之ヲ葬ルコト勿レト然  
 レトモ王遺命ニ從ハス位ニ即テ後直ニ英ニ歸  
 リ蘇格蘭ノ事ハ措テ顧ミス又王ノ世子タリシ  
 時其嬖臣ニガバストント云フ者アリエトワル  
 ド第一世ノ為ニ放逐セラレシカ是ニ至テ王又  
 之ヲ徵歸シ其寵嬖往時ニ加レリ○一千三百八

年王佛蘭西ニ至テ其王、女イサベルヲ娶リガ  
 ベストンヲ留メテ假ニ政ヲ攝セシム是ヨリ前  
 ガベストン王ノ寵ヲ恃テ横恣ヲ極メ諸侯ヲ凌  
 辱スルノミナラス又之ヲ愚弄シテ戲トスルニ  
 至ル其攝政トナルニ及貴族終ニ黨ヲ結テ王ノ  
 從弟ランカストルノ侯ヲ推シテ首長トシ王ノ  
 歸ルヲ待テガベストンヲ放逐セント請フ王其  
 狀ノ容易ナラサルヲ見テ強ナ之ニ從フト雖之  
 ヲ其舊國ニ逐ハス却テ愛倫ニ遣テ其國ノ都督  
 トス○一千三百九年王再ガベストンヲ徵シテ

其寵遇益甚シ貴族之ヲ争フト雖其言皆用キラ  
 レス一千三百十二年終ニ兵ヲ舉ケテ王ニ反シ  
 ガベストンヲスカルボロ一城ニ圍テ之ヲ虜ニ  
 シ後數日遂ニ其首ヲ刎ヌ王ガベストンノ為ニ  
 其仇ヲ報センコトヲ欲スレトモ國人其命ニ從  
 ハス終ニ貴族ト和ヲ結テ盡其請ニ從フ○王ノ  
 蘇格蘭ヨリ歸テ後其王グリユース土地ヲ回復シ  
 勢威漸ク強シ一千三百十四年ニ至テ其地ノ猶  
 英人ニ屬セル者ハスチルリングドンバルベル  
 卒ツキノ三城ノミナリ是歳王大舉シテ又蘇格

蘭ニ入り六月廿四日スチルリングノ近傍ニ至  
 リブリュースノ兵ト川ヲ隔テ、相對シ明日ヲ待  
 テ戰ントス時ニ英ノ軍十萬ブリュースノ兵ハ僅  
 ニ三萬ニ過キスブリュース自ラ及ハサルヲ知テ山  
 ニ據リ水ヲ前ニシ其一翼ヲ沼池ニ張り更ニ陷  
 井ヲ鑿チ設ケテ其中ニ尖楸ヲ樹ツ士卒亦互ニ  
 相奮テ敢死ヲ期ス英王ノ軍ハ兵士皆驕リ飲酒  
 喧嘩シテ旦ニ達シ約束整ハス明日戰起ルニ及  
 テ王ノ騎兵先進ミシカ其將グローストルノ侯  
 陷井ニ落チテ死シケレハ騎兵趨起スル際ブル

リスノ將ドイグラスノ為ニ襲ハレテ大ニ破ラ  
 ルブリュース又疑兵ヲ設ケ第二陣ニ向テ迫ル狀  
 ヲ為シ、カハニ陣膳ヲ奪ハレ戰ハスレテ皆走  
 リ全軍終ニ大ニ頽ル是ヨリブリュース勢漸強、全  
 國再英ノ鉗制ヲ免カル○王蘇格蘭ヨリ歸テ後  
 國人ノ王ヲ厭フコト愈甚シク議院十六人ノ議  
 事官ヲ選ミ王ノ政ヲ輔クト稱シテ其權ヲ抑制  
 ス○一千三百二十年王新ニヒト、スペンセルヲ  
 擢用シテ其父子ヲ貴寵ススペンセルハ故貴族  
 ノ裔ニシテ略才藝アリ其父モ亦常人ニ非ス然

ルニ貴族皆謂フ又一人ノガベストーンヲ生セリ  
ト一千三百二十一年ランカストルノ侯等倫敦  
ヲ奪テ議貢ヲ會シスペンセル父子ヲ追放ス王  
之ヲ怒テ兵ヲ起シ同二十二年三月十六日ラン  
カストルトボローブリージニ戰テ大ニ其兵ヲ  
敗リランカストルヲ擒ニシ其首ヲ刎ス○英領  
ノ佛ニ在ル者ハ英王ト雖モ其州ノ侯位ニ隸スル  
コト例ナリ故ニ英王ノ新ニ代立スルカ又ハ佛  
王ノ位ヲ嗣ク時ハ英王自佛ニ至リ其州ノ侯ト  
シテ臣禮ヲ執テ佛王ヲ拜シ佛王更テ其州ヲ賜

フ此事獨英佛ノ間ノミナラス封建ノ世ハ各國  
皆同一ニシテ此國ノ王彼國ノ州ヲ保ツ者ハ皆  
此ノ如シ然ルニ英王ハ隣國ノ王ニ屈スルヲ恥  
テ勉テ此禮ヲ避ケントシ佛王ハ英王ヲ辱ント  
種々ノ辭ヲ設ケテ屢英王ヲ招カントシテ之カ  
為ニ兩國ノ間ニ争ヲ生セシコト數ナリ一千三  
百二十二年佛王キールス第四世位ニ即キ又ギ  
ン子ノ州ノ為ニ英王ヲ招テ此禮ヲ行ハント  
ス然レトモ英王之ヲ拒テ至ルコトヲ欲セス  
ールス乃チ兵ヲ舉ケテギン子ヲ襲ハルトス是

改正 卷二 二十八

於テ一千三百二十五年英王其后イサベルヲ  
 遣リギーン子ノ州ヲ其子エドワルドニ讓リ  
 此禮ヲ行ハシメテ事解クルコトヲ得タリ○ロ  
 ジル、モルチメルト云フ者故ラシカストルノ黨  
 ニシテ其覆滅ノ後逃レテ巴勒ニ在リイサベル  
 ラ佛ニ至リモルチメルヲ見テ之ヲ悦ヒ是ヨリ  
 常ニ左右ニ昵近シテ遊宴ニ日ヲ送リ久クシテ  
 英ニ歸ラス英王ノ之ヲ徵スニ及テ終ニ再スベ  
 ンセル父子ヲ逐フヲ名トシモルチメルト共ニ  
 兵ヲ起シテ英ニ入リ一千三百二十六年九月廿

四日ツッホルクニ上陸ス時ニ英人ノスペインセル  
 ヲ惡ムコト甚クシテ貴族后ノ軍ニ加ハル者  
 多ク王ノ二弟モ亦其中ニ在リ王惶急逃レテ威  
 爾斯ニ至リ兵ヲ舉ケントセシカ國人來屬セス  
 又遷レテ愛倫ニ至ラントセシニ其船途ヨリ逆  
 風ノ為ニ吹返サレテ再威爾斯ニ上陸シ山中  
 潛匿スルコト數日既ニシテ搜獲セラレスペイン  
 セル父子ト共ニケニルナルスニ送ラレシカ後  
 數日ニシテスペインセル父子ハ斬殺セラル○后  
 既ニ王ヲ執ヘテ復憚ル所ナク日々モルチメル

ヲ寵愛シテ頗醜聲アリ終ニ王ヲ誣テ政事ニ堪  
 ハスト稱シテ之ヲ廢シ長子エドワルドヲ立テ  
 ントス時ニエドワルド年十四歳之ヲ肯セスシ  
 テ曰ク父未死セサルニ其子命ヲ受ケスシテ位  
 ニ昇ルハ道ニ非スト后其志ヲ奪フコト能ハス  
 一千三百二十七年一月二十日議員ヲ會シ王ニ  
 迫テ位ヲ讓ラシム時ニ王年四十四在位二十一  
 年ナリ後モルチメル竊ニ獄吏ニ命シ烙鐵ヲ以  
 テ王ノ肛門ヲ貫キ其腸ヲ燒テ之ヲ殺スト云フ  
 エドワルド第三世 一千三百二十七年一月廿九

日王多ストミンストルニ於テ即位ス時ニ年十  
 五ナリイサベルラモルチメルト共ニ政ヲ專ニ  
 シ國人怨嗟ス○蘇格蘭ノ王ブルムース英王ノ代  
 立シテ年尚幼ク又國人不和セサルヲ機トシテ  
 前年ノ恨ニ報センユトヲ欲シ是歳八月英ニ入  
 ル英王自ラ出テ之ヲ防キシカリアラス翌年和  
 成テ蘇格蘭ノ獨立ヲ許シエドワルド第一世ノ  
 奪取リタル冠笏及重器ヲ還與シ又王ノ妹ヲ以  
 テ蘇ノ世子ニ配ス○一千三百三十年モルチメ  
 ル王ノ叔父ケントノ侯ヲ殺シ又ランカストル

ノ侯ヲ獄ニ下シ又自<sup>ラ</sup>マ<sup>ー</sup>チ<sup>ノ</sup>侯トナリ其儀衛  
 儼然トシテ王ニ擬ス是ヨリ先<sup>キ</sup>王位ニ在リト雖  
 政權ハ皆モルチメルト后トノ手ニ在テ王ハ其  
 掌中ノ玩器ノミ王之ニ堪フルユト能ハス是歲  
 終ニ數人ノ貴族ト謀ヲ定メモルチメルヲ除カ  
 ントス時ニモルチメル后ト共ニ<sup>ル</sup>チン<sup>ハ</sup>ム<sup>ノ</sup>  
 城ニ在リ王其城主ト喋<sup>レ</sup>潛ニ隧道ヨリ城中ニ  
 入テ不意ニ后トモルチメルトヲ執ヘモルチメ  
 ルヲ縊殺シ后ヲライ<sup>イ</sup>レン<sup>グ</sup>ノ城ニ幽ス○此頃  
 蘇格蘭ノ貴族事ニ因テ其王ヲ恨ミ<sup>シ</sup>ギン<sup>バ</sup>リ<sup>オ</sup>

ル<sup>ル</sup>子<sup>ヲ</sup>奉<sup>シ</sup>テ亂<sup>ヲ</sup>作<sup>ス</sup>者<sup>アリ</sup>時<sup>ニ</sup>ズ<sup>ル</sup>ス  
 既ニ死<sup>シ</sup>テ其子ダビト第二世猶幼ナリ王是ニ  
 於テ貴族ヲ助ケ一千三百三十二年ダビトヲ逐  
 テバリオルヲ立ツ既ニ<sup>レ</sup>テ<sup>バ</sup>リ<sup>オ</sup>ル<sup>ノ</sup>其南方ノ  
 地ヲ密ニ英ニ讓<sup>リ</sup>シコト顯<sup>レ</sup>テ同三十四年國  
 人又背<sup>キ</sup>再<sup>バ</sup>リ<sup>オ</sup>ル<sup>ヲ</sup>逐<sup>テ</sup>ダビトヲ位ニ復ス  
 此亂佛王兵ヲ送テダビトヲ援ケ<sup>レ</sup>ニヨリテ英  
 王深ク之ヲ衛メ<sup>リ</sup>他<sup>ノ</sup>王熱佛ニ<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>因  
 半ハ此ニ胚胎セ<sup>リ</sup>○一千三百三十八年佛國  
 王<sup>キ</sup>ル<sup>ノ</sup>第四世死ス王ニ<sup>テ</sup>女子<sup>アリ</sup>然

正トモ佛國ノ法男子ニ非レハ位ヲ嗣カコトカ  
 カハハ是ヲ以テヒ<sup>○</sup>第三世ノ孫ヒ<sup>○</sup>テ立  
 テ、ヒ<sup>○</sup>ガ第六世<sup>○</sup>稱天然ルニ英王ノ母<sup>○</sup>チ  
 一ルス第四世<sup>○</sup>妹ニシテ王ハ其甥タリ王乃辭  
 ヲ設ケテ白ク其母位ヲ得サルモ其子男子タラ  
 ハ豈繼クヤト<sup>○</sup>得サラシヤト一千三百三十八  
 年遂ニ少許ノ兵ヲ率キテ<sup>○</sup>空ル<sup>○</sup>上陸  
 ニ同四十年又兵ヲ發シテ佛ノ戰艦トス<sup>○</sup>トス  
 ニ戰テ之ヲ破リ進テ<sup>○</sup>ア<sup>○</sup>シト子<sup>○</sup>トニ至ル然レト  
 モ此ニ舉弁ニ大効ナレ一千三百四十六年王三

万餘人<sup>○</sup>將<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>七月十二日ノ<sup>○</sup>上  
 上陸セシカ<sup>○</sup>佛王<sup>○</sup>之<sup>○</sup>聞<sup>○</sup>自<sup>○</sup>セ<sup>○</sup>河  
 畔ニ出迎<sup>○</sup>橋梁<sup>○</sup>撤<sup>○</sup>之<sup>○</sup>待<sup>○</sup>英王既ニ至  
 リ河ヲ渡<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>得<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>乃<sup>○</sup>一<sup>○</sup>計<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>設<sup>○</sup>ケ<sup>○</sup>河  
 ニ沿<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>上<sup>○</sup>流<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>赴<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>狀<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>為<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>カ<sup>○</sup>佛王又之ヲ  
 防<sup>○</sup>カ<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>其<sup>○</sup>軍<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>率<sup>○</sup>キ<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>之<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>隨<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>英王佛軍ノ既  
 ニ動<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>見<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>急<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>ホ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>歸<sup>○</sup>リ<sup>○</sup>橋<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>架<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>テ  
 河ヲ渡<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>然<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>亦<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>ソ<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>河<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>至<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>及<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>橋梁  
 又皆破壊セ<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>敵軍其前岸ニ在<sup>○</sup>リ<sup>○</sup>加之佛王又  
 大兵ヲ以<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>其<sup>○</sup>後<sup>○</sup>追<sup>○</sup>躡<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>然<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>ト<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>英王驚<sup>○</sup>カ<sup>○</sup>ス



一ノ淺所ヲ探得自水中ニ馬ヲ躍ラシ呼テ  
 曰我ヲ愛スル者皆我ニ繼ケヨト是ニ於テ全  
 軍皆渡リ襲テ前岸ノ敵ヲ敗リ其翌日クレレト  
 ノ村ニ陣ス時同年八月廿五日ナリ佛王接踵  
 来リソム河畔ニ至ルハ潮高クテ涉ルコ  
 トヲ得ス一日ヲ経テクニ一ノ近傍ニ達ス時  
 佛人行軍ニ疲レ列伍整ハス佛王謂ヘテク英  
 王ハ既ニ囊中無物ナリト兵士ヲ憇ハセ明日ヲ  
 待テ戰ハトテ前軍約束テ守ラズ此日午  
 後第三時不意ニ英ノ陣前ニ達ス適兩軍既ニ交

リ頃日雷雨大ニ起テ弓箭霑濡レ佛軍射  
 コテ得ス英人至其弓ヲ囊中納メテ沾ホサ  
 カリ因テ弓勢完強テ始テ虚箭ナシ既ニ  
 シテ雨止ル日始ルニ及ビ英軍ハ日ヲ背ニシ  
 佛軍ハ日ニ面レテ前軍終ニ退ル得ス二陣ニ向  
 テ退走ス陣其崩テ来ル防無シト劍ヲ拔テ  
 之ヲ逐ヘトモ過テ可ク終ニ陣下共ニ潰亂  
 シ佛將ヲ討テ之ヲ斬リテ麾下率テ英  
 射手ヲ貫過シ道ニ前軍向テ突テ是日  
 前軍將ハ世守エテ此役甫メテ十

六歳之ヲ從軍ノ始、下ス侍臣世子以急請ルヲ見  
使ヲ馳セ貴主ノ援ヲ請フ時、王近傍ニ風車  
上ニ在リ戰ヲ指揮セシカ使者ヲ見テ問テ曰ク  
我兒死セリヤ使者答テ曰ク否王又問テ曰ク傷  
ツケリヤ答テ曰ク否主ノ曰ク然ラハ我未救  
可ラス我兒ヲシテ今日金靴距ヲ得セシヨト  
靴距ハ騎兵ノ靴後ニ在テ馬ヲ進ムル具ナリ狭  
士ノ靴距ニ騎兵ノ靴後ニ在テ馬ヲ進ムル具ナリ狭  
ヲ得靴距世子之ヲ聞テ倍奮戰シ遂ニ佛軍ヲ崩  
隊ヲ破リ晚ニ至テ佛軍大ニ敗北ニ佛主急ニ  
遊軍ヲ呼テ戰函テコトヲ欲テ佛軍ヲ崩

潰スル勢復收拾ス可ラス僅ニ六十餘人ヲ從ヘ  
テ戰場ヲ遁ル是日英軍三万佛軍十二万中ニ就  
テ佛軍死セル者四万人英人ハ數十人ニ過キス  
此役英ノ軍中ニ加農六門ヲ備フ是兵事ニ大砲  
ヲ用キタル初ナリ西洋ニテ英國ハニリ第一  
ヲ發明スベク云フ又ニ一説ニハ一千三百三十六年  
日耳曼人ノ説ニ據ルハ支那人ハ上古ヨリ火薬  
ヲ洋人ノ説ニ據ルハ支那人ハ上古ヨリ火薬  
製法ヲ知リテ云ハリ西洋ニテモ初ハ只遊戯  
ノ事ニ止リテ其功ニ用アルヲ知ラズ後兵事  
ニ用キルニ至テモ多クハ長槍大箭ヲ投スルカ  
為ニ製造モ甚重大ニ發明セシハ後世ノ事ナリ大砲  
ノ製造モ甚重大ニ發明セシハ後世ノ事ナリ大砲  
ス者ナリト結末セ○カレハ佛國北岸ノ港ニ  
シ者ナリト結末セ○カレハ佛國北岸ノ港ニ

改正 卷三

テ英ノドールブルト相對シ英人此地ニ據ルトキ  
 ハ兵ヲ佛國ニ進ムルノ利ヲ得又内地ニ入テ退  
 路ヲ絶タル、患ナク且其地城砦險要ニシテ少  
 許ノ軍艦ヲ港中ニ泛ムル時ハ之ヲ守ルコト容  
 易ナリ英王之ヲ得テ永ク佛ノ咽喉ヲ搯セント  
 シクレシノ戰後三日直ニ轉シテ此邑ヲ圍ミ  
 タリ然レトモ城將善ク防テ抜クコト能ハス王  
 乃軍艦ヲ以テ海門ヲ塞キ糧道ヲ絶テ之ヲ長圍  
 ス○是歲蘇格蘭ノ王ダビト英王ノ國ニ在ラサ  
 ルヲ伺テ英國ニ攻入ス英王ノ后ヒリバ其兵ヲ

逆ヘテ十月十二日太子ベルレス、カロンスニ  
 戰ヒダビトヲ擒ニス后ハ英斷ニシテ事ニ怯レ  
 ス然レトモ又慈愛ニシテ甚婦徳ヲリ屢王ノ過  
 激ヲ諫テ匡救ヲ請所少ナラス○佛王カレシ  
 リ圍ヲ受ルヲ聞キ屢之ヲ援ハシトスニトモ英  
 兵ノ為ニ妨ケラレテ意又如クハスニトモ得  
 城將四方ノ援路絶ユルヲ見テ徹底固守セシト  
 決意シ但糧食ヲ續カサランヲ恐テ悉ク城中ノ  
 老幼婦女ヲ逐テ英軍ノ氣屈スルヲ待居リ然  
 レトモ久シクシテ敵軍屈セズ城中食盡テ始

改正英史 卷二 三五

犬馬ノ類ヲ食セシカ犬馬亦盡ク兵士皆起ツ  
 ヲト能ハス一千三百四十七年八月初テ圍ヲ受  
 ケシヨリ十一月ニテ遂ニ降ヲ請フ是於テ  
 英王代テ城中ニ入り悉市中ノ人ヲ逐ク更ニ填  
 ツルニ英人ヲ以テス○是歲九月英王佛下十箇  
 月ノ寢兵ヲ約シテ國ニ歸ル其後一千三百四十  
 八年及九年ノ間歐羅巴ニ黒疫ト名シテ疫癘流  
 行シテ英佛ノ中ニモ死凶極クテ多シ是ヲ以テ  
 二國未ダ兵ヲ罷メスト雖以下數年ノ間一モ記ス  
 ルニ足ル者ナシ○世子エドワルド下年長スルニ

及テ驍武人ニ超テ英國ノ武將一人モ其右ニ出  
 ツル者ナシ常ニ好テ黒色ノ甲ヲ著ルヲ以テ名  
 ケテ黒公子ト云フ一千三百五十六年七月黒公  
 子再、ボルドー佛邑名ヨリ進ミ途中ノ都府村落ヲ  
 燒燼シテ九月十九日ポインチールスノ近傍ニ陣  
 ス時ニ佛王ヒムゾ第六世既ニ死シテ其子ジ  
 位ニ在リ英人ノ来ルヲ聞テ急ニ兵ヲ聚メテ出  
 迎ヘ黒公子ト同日ポインチールスニ至リ公子ノ  
 軍ヲ距ルコト里許ニ陣ス時ニ公子ノ軍ハ一万  
 餘ニシテ佛軍ハ六万ニ過ク公子大軍ノ掩至ス

改正 卷二 三六 八月

ルヲ見テ大ニ驚キレカ既ニレテ曰事既ニ此ニ  
 至ル只決戦スルコトアル耳ト自陣中ヲ巡テ兵  
 士ヲ勵シ勇ヲ養テ戦ヲ待ツ時ニ佛ノ軍中ニ二  
 人ノ僧アリ兩軍ノ間ニ周旋シテ戦ヲ止メンコ  
 トヲ欲シ其意ヲ黑公子ニ告ク公子答テ曰若我  
 武ヲ辱ムルコト無クハ講和ノ事モ聽カサルニ  
 非スト然レトモ佛王ハ既ニ全勝ヲ期シ公子面  
 縛シテ降ルニ非スハ和ヲ講スルコトヲ許サス  
 二人歸テ之ヲ公子ニ告ク公子ノ曰丈夫豈戦ハ  
 スレテ擒ニ就ク者アラシヤト二人終ニ和ノ成

ラサル其知テ復周旋セヌ十九日黎明佛王軍  
 分ケテ三隊トシ第一隊ハ世子ヲ將トシ第二隊  
 ハ佛王リルシニ將トシ第三隊ハ王自之  
 ヲ率テ進テ英ノ陣ヲ襲フ是日英ノ陣ハ小山ノ  
 上ニテ佛軍ヲ進ムニ便シク佛王先輕兵ヲ出シ  
 道ヲ關カシテ然ニ輕兵進テ半途ニ至ル比  
 英ノ弓手兩側ニ埋伏シ林樾ノ陰ヨリ亂射セシ  
 カハ輕兵ノ死傷數ヲ知ラズ前軍之ヲ見テ代戦  
 セシト隘道中ニ進入セシニ敗兵潰奔レ路狭ク

シテ相讓<sub>レ</sub>中ト至<sub>レ</sub>得<sub>ル</sub>時ニ前宵英ノ一將公子  
 ノ命ヲ受ケテ佛<sub>ノ</sub>陣後ニ潛<sub>ル</sub>者ナリ急ニ起<sub>テ</sub>  
 之ニ乗セシカハ佛<sub>ノ</sub>前軍顧ミテ度ヲ失ヒ紛亂  
 言<sub>フ</sub>可<sub>ラ</sub>ス公子乃<sub>チ</sub>全軍ヲ驅テ山下リ終ニ大  
 ニ其前軍ヲ破ル是<sub>レ</sub>於<sub>テ</sub>三陣ニ戰<sub>ハ</sub>シテ潰  
 走<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub>者ハ王ノ一隊ニ王敗<sub>ル</sub>怒  
 リ自<sub>ラ</sub>公<sub>子</sub>ニ逢<sub>テ</sub>戰<sub>フ</sub>決<sub>セ</sub>ト手ニ大斧ヲ提<sub>ケ</sub>  
 テ敵中ニ入<sub>リ</sub>縱橫奮戰<sub>セ</sub>カ從<sub>テ</sub>兵次第ニ戰死  
 日暮ニ至<sub>テ</sub>馬側ニ從<sub>フ</sub>者ハ僅ニ數騎ニ過<sub>キ</sub>  
 ス終ニ其季子<sub>ヲ</sub>共<sub>ニ</sub>擒<sub>メ</sub>セ<sub>ラ</sub>ル<sub>ル</sub>黑公子佛<sub>ノ</sub>王ヲ擒

ニスト聞<sub>テ</sub>急ニ使<sub>ヲ</sub>遣<sub>シ</sub>テ之ヲ迎<sub>ヘ</sub>自<sub>ラ</sub>酒饌ヲ  
 設<sub>ケ</sub>テ王<sub>ヲ</sub>給<sub>シ</sub>仕<sub>セ</sub>王ノ身後ニ仄立<sub>レ</sub>テ敢<sub>ヘ</sub>テ  
 席ニ就<sub>カ</sub>ス其他饗待凡<sub>ソ</sub>テ子ノ父ニ事<sub>ル</sub>カ如  
 シ佛<sub>ノ</sub>王大<sub>ニ</sub>悅<sub>ビ</sub>淚ヲ流<sub>シ</sub>テ曰<sub>ク</sub>戰勝タスレ擒<sub>ニ</sub>  
 セ<sub>ラ</sub>ル<sub>ル</sub>ハ我命ナリ然<sub>レ</sub>トモ斯<sub>ク</sub>寬仁ナル公  
 子ハ手ニ嬰<sub>ル</sub>ハ又不幸中<sub>ノ</sub>幸ナリト是日佛<sub>ノ</sub>軍  
 貴族ノ死<sub>スル</sub>者二千五百人兵卒死<sub>スル</sub>者七八  
 千人其生獲<sub>セ</sub>ル<sub>ル</sub>者ハ英<sub>ノ</sub>軍ノ全數ニ二倍ス  
 ト云<sub>フ</sub>○公子既<sub>ニ</sub>戰<sub>ヒ</sub>勝<sub>テ</sub>天<sub>ヲ</sub>祭<sub>テ</sub>擁護<sub>ノ</sub>恩  
 ヲ謝<sub>シ</sub>又有功<sub>ヲ</sub>論<sub>テ</sub>賞<sub>シ</sub>翌年四月ニ至<sub>ル</sub>

迄ボルトドルニ滞留シ是月廿四日佛王ヲ以テ英  
 三凱旋ス倫敦ノ市人公子ノ戰捷ヲ聞キ途中ニ  
 テ賀ヲ奉ラント郊外ニ出迎ラル者數千人公子  
 佛王ヲシテ威服ヲ著ケ軍馬ニ騎ラシメ自小駒  
 三跨テ其側ニ從ヒ市人ニ擁環セラレテ空スト  
 シシスドルニ至ル英王佛王ノ來ルヲ聞テ又自  
 出迎ヘ響應丁寧ニシテ至ラザル所ナシ佛王英  
 國ニ留ルコト三年常ニ賓禮ヲ以テ待セラレ曾  
 テ囚虜ノ憂ヲ知ラズト云ク○是歲八月三日蘇  
 格蘭ノ王ヲ縱レテ國ニ歸ラシム○佛國王ヲ失

テヨリ國事紊亂シ騷動止マズ王亦頻ニ歸ラ思  
 ヒ一千三百五十九年密ニ英王ト議シテ佛國ノ  
 半ヲ讓テ國ニ歸ラシメ下約セシカ其報佛國ニ至  
 ルニ及ヒ國入之ヲ肯セズ皆由半國ヲ以テ一王  
 ニ易フルコト能ハズト是ニ於テ英王再兵ヲ起  
 レ是歲十月ボルトドルニ至リ終ニ巴勒バ近  
 傍ニ迫テ世子キリヤスヲ戰ヲ決セシト然レ  
 トモキリルス壁ヲ固クシテ出戦ハス適英軍糧  
 食ヲ缺テ止マシムコト能ハズ陣ヲ旋レ轉ルル  
 スニ至リシニ此地ニ於テ又暴風沙為ニ營ヲ破

ラレ兵士死スル者多シ王乃意ヲ講和ニ決シテ  
 千三百六十年五月兩國使節相會シテ議ヲ定メ  
 佛國ヨリアケイタオンノ全州及ポイト一等ノ  
 數郡ヲ讓リ又三百万クロネン金銀ヲ以テ王ノ  
 身ヲ贖シト約ス○佛國既ニ贖金ヲ約ラ定ムル  
 雖一時ニ其金ヲ辨スルコト能ハズ是歲十月其  
 一分ヲ贈テ王身ヲ贖還シ別ニ貴族四十人ヲ  
 送テ質ト為タシカ其内英王ヲ欺テ逃シ歸ル者  
 アリ佛王英ニ在リテ間其待遇ノ厚キニ感シテ  
 曰ク我レ豈言信ヲ破テ其恩ニ背テ可シ哉ト再

英ニ至テ自質トナリ一千三百六十四年遂ニ英  
 ニ死ス○此頃カス及びセリ西班牙王兄弟位ヲ争  
 ヒ弟ハシカシ佛國ノ兵ヲ借テ其兄ペドロヲ逐  
 ヒペドロ立其ニ女ト共ニ京ト下リニ道ルボル下  
 上佛國讓地中一ニシテ是時黒公子此地ニ  
 在テ佛國新地ヲ管轄セリ公子ペドロノ寄ル所  
 ナキヲ憐メ共千三百六十七年三万月兵ニ將ト  
 シテ西班牙ニ入リハシリヲ逐テペドロヲ位  
 ニ復ス然レドモペドロ性凶愼ニシテ公子ノ恩  
 ラ忘ル公子ヲ遇スルコト無狀ナリ之ニ加ルニ

改正 聖



氣候異ニシテ兵士病ヲ得ル者多ク公子亦其病ニ罹ルヲ以テ是歲又ボクノ歸ルニ歸ル○公子西班牙ヨリ歸テ後身軀漸ク衰ヘテ自兵事ヲ視ルコト能ハス是ヨリ英國ノ武威日ニ衰ヘ四方ノ征戰敗辱ヲ受ケ寄著多ク公子病薄ク中等在テ是等ノ事ヲ聞キ頻ニ心思ヲ勞セヨリ病愈重ク一千三百七十六年六月終ニ死ス時ニ年四十七公子勇武絶倫ナルガハ知ラズ雍和ニシテ人ヲ愛シ其死ニ及テ公私共ニ惋惜セラルル無ク公子ノ將ニカポトルテ云フ者ヲカボル

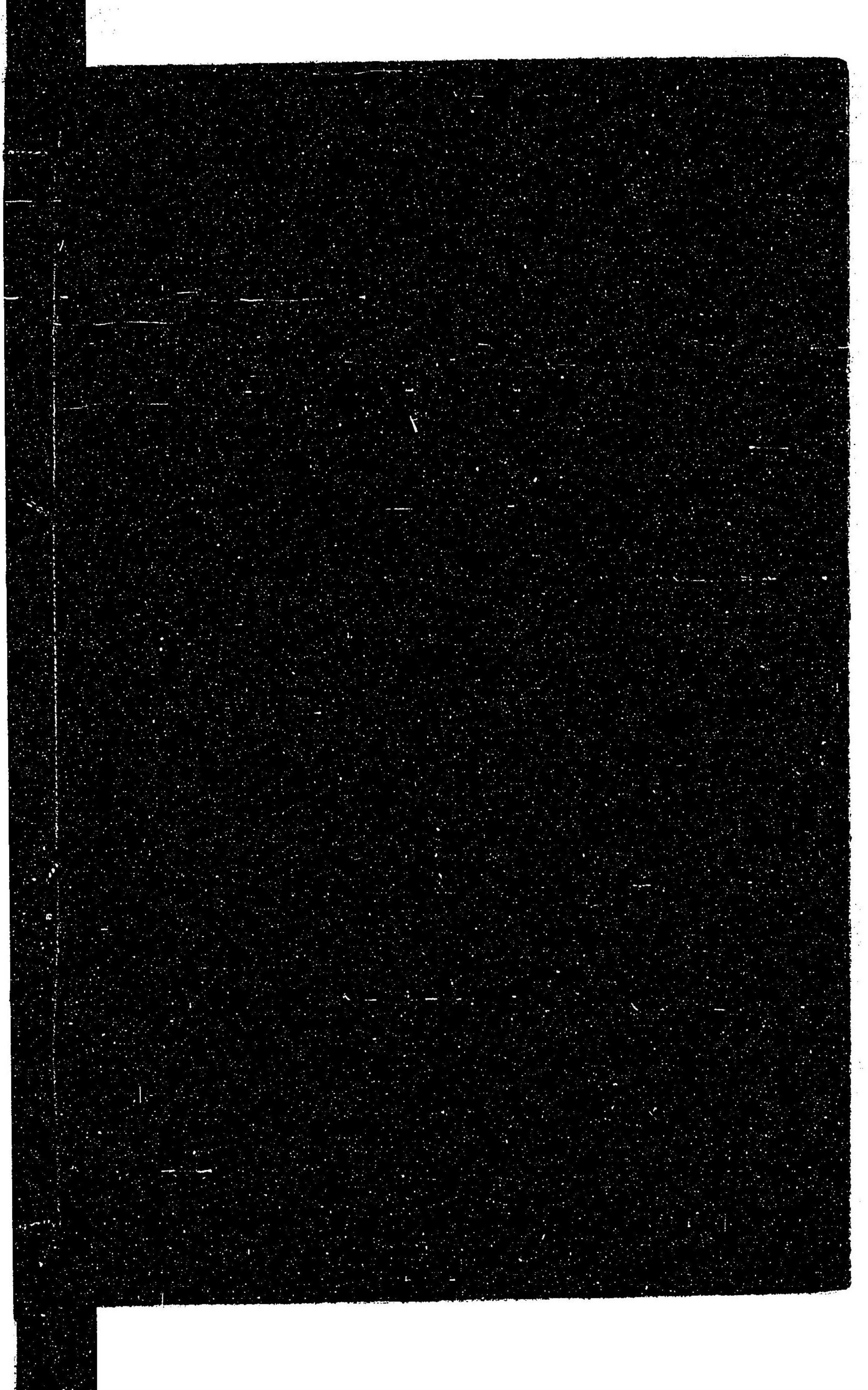
ナシトシテ佛軍ノ後ヲ襲ヒシ者ニシテ其後屢戰功ヲ立テ公子ノ為ニ愛セラレシカ公子ノ死ニ及テ大ニ悲シ食ヲ絶テ死スト云フ○是時王年既ニ高シ黒公子ノ死ヲ聞テ哀慟禁ヲ不因テ病ヲ成シ一千三百七十七年六月一日終ニ死ス時ニ年六十五在位五十二年ナリ黒公子ノ子リキルド位ヲ嗣ク王在位ノ開始メテ法律ノ文ヲ書スルニ英語ヲ以テス其前ハラキレトク第一世ノ頃ヨリ皆佛文ヲ用キタリト云フヘンリノ第三世人時始メテ議院ニ平

改正 卷二 早

民ヲ加ヘシヨリ時々或ハ上下ヲ分テ會スト雖  
制度未備ハラス王ノ世ヨリ其法始メテ整フ英  
國古來ノ法律王ノ時ニ至テ完備スル者多ク斷  
獄ノ官吏モ亦文學ニ長セル者輩出シテ裁決  
法漸ク正シマシト云フ歴史家王ノ世ヲ稱レ  
テ英國ノ法律王ノ時ニ至テ殆其子午線ニ近レ  
ト云ヘリ

令邨 亮 校

改正 英史卷二終



東 京 圖 書 明  
類 聚 卷 之 一  
一 冊

17  
16